

鉄鋼概況

四月輸出 過去最高を更新

鉄鋼エコノミスト 左近司 忠政

三月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は、前月末比二・〇％減で六カ月ぶりに減少した。四月の粗鋼生産は輸出向けの好調に支えられて前年同月比五六・七％増と六カ月連続して前年同月実績を上回った。四月の輸出（全鉄鋼）は四月としては過去最高を更新した。鉄鋼メーカー策定の四〇六月期生産計画（粗鋼生産ベース）は前期比四・三％増で、経済産業省による同期の粗鋼需要見通しを上回った。高炉の主原料である鉄鉱石、原料炭の価格は大幅に上昇している。普通鋼電炉一七社、特殊鋼專業六社の前三月期決算も発表され、普通鋼電炉メーカー一七社の決算は経常ベースで一社が減益、五社が赤字となった。四月の世界（六六カ国）粗鋼生産量は、前年同月比三五・七％増の一億二一六五万トンとなり、六カ月連続で前年水準を上回った。



◆四月輸出、過去最高

鉄鋼連盟が発表した三月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は、前月末比九万八〇〇〇トン（二・〇％）減の四七四万四〇〇〇トンとなり六カ月ぶりに減少した。在庫率は前月末比二五・五ポイントと大幅に低下し、一〇七・九％となった。一方、普通鋼鋼材の三月末市中在庫は鉄連が行なった全国市中鋼材数量調査によると、前月末比〇・四％、九〇〇〇トン増の二一九万五

〇〇〇トンの微増となった。三月の販売量は前月比五・六％、四万一〇〇〇トン増の二六七万六〇〇〇トンとなったために国内在庫率は前月末比四・八ポイント低下し九五・六％となり、二〇〇八年四月末以来二年ぶりに一カ月の大台を割り込んだ。

主要製品の在庫状況を見ると、三月末の薄板三品（熱延・冷延・表面処理鋼板）の国内在庫（メーカー・問屋・コイルセンターの合計）は、前月末比二・八％、一〇万

トン減の三四一万五〇〇〇トンとなった。前月実績を下回るのは四カ月ぶりである。在庫回転率は一・八二カ月で前月に比し〇・二一ポイント低下した上、過去最低の在庫量だった二〇〇九年七月（三三九万一〇〇〇トン）での在庫回転率二・三三カ月を大きく下回っており、需給タイト感が一段と強くなっている。主要建材製品であるH形鋼の四月末の全国流通在庫は、新日鉄の建材特約店組織である「ときわ会」の調査によると、前月末比二二〇〇万トン、一・二％増の一八万二一〇〇トンと六カ月ぶりに前月を上回った。メーカー各社がラインの工事休止への先作り対応を行なったことで、一時的に在庫が促進され、仮需の反動から出庫が抑えられたこともあり在庫増となった。

鉄鋼連盟が発表した速報によると、四月の粗鋼生産は前年同月比五六・七％増（前月比三・八％減）の八九八万八〇〇〇トンとなり、六カ月連続で前年同月実績を上回った。一日当たりの生産量は前月より一七〇〇トン少ない二九万九六〇〇トン（年換算一億九三五万トン）であった。国内需要は伸び悩んでいるが、輸出向けの好調に支えられて高めの生産水準を維持した。

財務省が発表した四月の鉄鋼貿易統計によると、輸出（全鉄鋼）は前年同月比六一・六％増（前月比では一七・六％減）の三四六万九〇〇〇トンとなり、四月としては一九七〇年に記録した三一五万八〇〇〇トンを抜いて過去最高を更新した。鉄鋼輸出は三月が決算期末となるため、

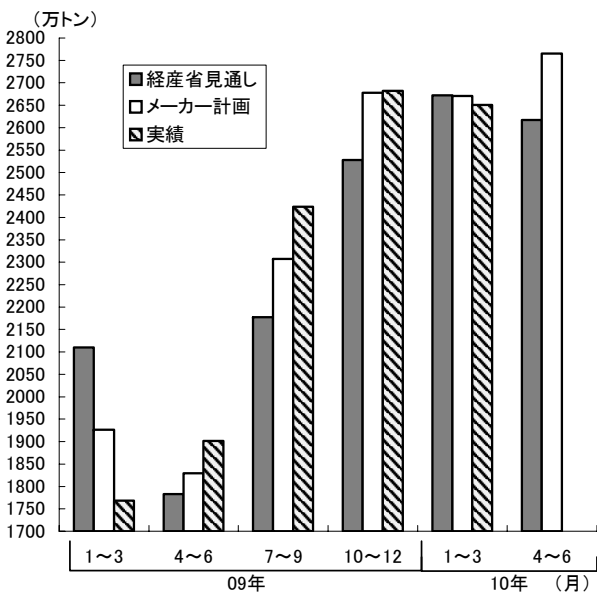
四月は反動で減少する季節要因があるが、二〇一〇年はアジア市況が上昇局面にあったため三〇〇万トン半ばの高水準が続くことになった。輸入は同二・三倍の六七万一〇〇〇トンと四カ月連続で前年を上回った。国別輸出では最大向け先の韓国・台湾などアジアNIEs諸国向けが一三〇万二〇〇〇トン（前年同月比三七・六％増）、ASEAN向けが八二万三〇〇〇トン（同二・二倍）、中国向けが六六万五〇〇〇トン（同三五・五％）と主力のアジア向けがいずれも好調だった。アジア以外では中東向けが一三万四〇〇〇トン（同二・五倍）、米国向けは一七七〇〇〇トン（同二・五倍）、ロシア向けが一六〇〇〇トン（同一七・八倍）と前年の低水準の反動もあり、いずれも大幅に増加した。国別輸入では、アジアNIEsからが二九万一〇〇〇トン（同七一・六％増）、中国からが一二万一〇〇〇トン（同二・二倍）、ロシアからが八万六〇〇〇トン（同一二・六倍）だった。

◆四〇六月期粗鋼生産計画、二七六五万トン

鉄鋼メーカーが策定した四〇六月期生産計画を経済産業省が集計したところ、粗鋼生産ベースで前期比一一四万トン、四・三％増の二七六五万トンとなった。先月に紹介したように、経済産業省は四〇六月の粗鋼需要見通しを二六一七万トンとしたが、生産計画では同見通しを一五〇万トン程度上回るものになっている。輸出向け需要の好調を背景にメーカー各社は高めの計画を立ててお

り、二〇〇八年七～九月期以来九期ぶりに二七〇〇万トンを上回る計画となっている。計画によると、普通鋼鋼材の生産量は前期比一・三%増の一九三〇万トンで、このうち国内向けは、季節要因による製造業向けの減少などを受けて一一五九万トンと前期実績を若干下回るものとなっている。ただ、夏季減産を控えた普通鋼電炉メーカーの計画が高めになっていることもあって、減少は小幅にとどまる公算が大きい。

図一 粗鋼生産の四半期別推移



一〇月以降のスポット価格の動向は現時点では不透明だが、中国の鉄鋼生産増などを背景に鉄鉱石、原料炭ともに需給逼迫が続く可能性が高い。七～九月積みみの水準が年度末まで続くと、主原料だけで最大二兆円のコストアップになる可能性がある。原料価格の上昇を鋼材価格への転嫁が遅れた場合、二〇一〇年度の高炉メーカーの収益は大幅に圧迫される懸念がある。

◆電炉各社、前三月期業績

先月に高炉四社の二〇一〇年三月期の業績を紹介したが、普通鋼電炉一七社、特殊鋼專業六社の前三月期決算も発表された。トピー工業、合同製鉄、東京製鉄、JFE電鋼など普通鋼電炉メーカー一七社の決算は、經常ベースで豊平製鋼が増益を果たした以外、一社が減益、JFE電鋼や東京製鉄など五社が赤字となった。原料の鉄スクラップ価格は前期比トーン一六六〇〇円～二万二〇〇〇円と約四割低下したが、それ以上に鋼材販売数量と販売単価が低下した。数量は建設需要の低迷、とくにマンションやオフィスビルなど建築向けの不振が響いた。販売数量は東鉄が一〇〇万トン減少したほか、合同製鉄は四〇万トン、共英製鋼が二九万トンと軒並みダウンした。加えて販売単価は大きく下落し、下げ幅は東鉄がトーン六万～四〇〇円だった以外、JFE電鋼二万八二〇〇円、朝日工業が二万五〇〇〇円となっている。二〇一〇年三月期は多くが増収を予想しているが、スクラップ価

一方、輸出向けは好調を継続し、同四・一%増の七七一万トンと四～六月期としては三四年ぶりの高水準を達する見通しとなっている。このように国内の伸び悩みに対して輸出が好調を維持することで輸出比率は一段と高まり、特殊鋼を含めた四～六月期の輸出比率は三九%と四割に迫る勢いとなっている。ただ、原料価格の上昇に伴い、鋼材価格にも先高観が強まっている。経産省は「国内外で仮需が発生している可能性が強く、実需を見極めた慎重な対応が必要」としている。

◆高炉の二〇一〇年度主原料コスト大幅上昇

高炉の主原料である鉄鉱石、原料炭の価格は大幅に上昇している。鉄鉱石の四～六月積み価格はトン当たり一三〇ドルで暫定的に資源大手との間で合意がみられているが、七～九月積み価格は指標価格の三月以降の上昇を受けて、一五八ドル(豪州産粉鉄、本船渡し)と三割強上昇する見通しとなっている。一方、原料炭は仮合意した四～六月価格(トン二〇〇ドル)に対し、足元のスポット価格は二三〇ドル前後となっている。中国が一月以降、月間三〇〇～五〇〇トンの輸入を続けているほか、春先の悪天候から豪州からの供給が細まっているためスポット価格は高値寄りに推移している。原料炭の七月積み以降の価格交渉はこれからだが、豪BMAなど有力サプライヤーがスポット価格上昇などを理由に値上げを提示してくるのは必至と思われる。

格が四〇～五〇%上昇するとみており、損益面については増益、減益予想が半々となっている。

特殊鋼專業六社については、純利益は日立金属と愛知製鋼が黒字化したが、三菱製鋼が赤字に、大同特殊鋼、山陽特殊鋼、日本高周波は赤字が拡大した。日立と愛知は販売量の減少幅を抑え、コスト削減を進めて営業黒字を確保した。他の四社は販売量の減と販売価格の低下が大きく、営業赤字となった。今期は原料高が減益圧力となるが、販売量と販価の改善を見込み、全社が増収、当期純利益は日立が増益、愛知が減益、他四社は黒字化を図るとしている。

◆四月世界粗鋼生産、六カ月連続増

世界鉄鋼協会がまとめた四月の世界(六六カ国)粗鋼生産量は、前年同月比三五・七%増の一億二一六五万トンとなり、六カ月連続で前年水準を上回った。中国が同二七・〇%増の五、五四〇万トンと大幅に増加し、日本(同五六・七%増)、EU二七(同六四・一%増)、米国(同七九・四%増)も大きく回復した。また、ブラジル(同五六・六%増)、ロシア(同二八・九%増)など新興国も生産好調が続いた。一～四月の累計生産量は四億六七八〇万トンで、前年同期に比べ三一・八%となった。同期における中国の生産量は二億一三八〇万トン(約二五%増)で、全体の四五%を占めた。